

大衆性と投票行動の関連性に関する研究

中尾 聡史¹・沼尻 了俊²・宮川 愛由³・藤井 聡⁴

¹学生会員 京都大学工学研究科都市社会学専攻（〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂4）
E-mail: nakao@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

²学生会員 京都大学工学研究科都市社会学専攻（〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂4）
E-mail: numajiri@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

³正会員 京都大学大学院工学研究科助教（〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂4）
E-mail: miyakawa@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

⁴正会員 京都大学大学院工学研究科教授（〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂4）
E-mail: fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

スペインの哲学者オルテガは、「自分に対してなんらの特別な要求を持たない」者のことを「大衆」と呼び、近代社会においてその出現が顕著となり様々な社会的弊害をもたらしていることを批判的に論じている。実際、我が国においても世論の空気に流されやすい大衆による人気政治が問題となっていることがしばしば指摘されている。そのため、大衆が政治に関与する手段としてより影響力の強い投票行動の判断基準について検討することは極めて重要であると考えられる。そこで、本研究では、アンケート調査及び分析を行い、オルテガの論ずる大衆性と投票行動の判断基準の関連性に関して探索的に把握することを目的とする。

Key Words : *the vulgarities of masses, vote, Ortega's "The revolt of the masses"*

1. はじめに

議会制民主制を基調とする我が国では、選挙によって選出された代議士が、議会に集まり社会の諸問題について議論を交わすことで政策が決定される。そのため、議会を構成する代議士各々が、自由な議論を行い総合的な政治判断を下すことのできる能力を十分に有していなければ、議会制統治は有効に機能しえない。

そこで、重要となるのが、代表者を選出する有権者による投票行動である。なぜなら、政治家としての資質を備えた者が選出されるかどうかは、有権者の投票判断に委ねられるからである。つまり、より善き社会に向けて議会制民主制が適切に機能するには、選挙民たる一般民衆が正しい政治判断を下せる政治家を識別する能力を保持していることが重要な前提条件となる。

しかしながら、近年、マニフェスト選挙などに見られるように、政治家の人格や議論の能力よりも、政党および候補者が掲げる具体的政策が、投票の際の判断基準として重視される傾向がある。また、選挙において、政治家としての実力や実績よりも、知名度の高さが過大に評価され、テレビタレントやお笑い芸人などが当選する

事例が散見される。こうした社会的風潮の背景には、スペインの哲学者オルテガ(1883-1955)が論ずる「大衆」の存在が考えられる。

オルテガは、その代表的著書「大衆の反逆」(1930)¹⁾において、「自分自身に特殊な価値を認めようとはせず、自分は“すべての人”と同じであると感じ、そのことに苦痛を覚えるどころか、他の人々と同一であると感じることに喜びを見出しているすべての人(Ortega, 1930 神吉訳, 1995, p.17)」のことを大衆とよび、20世紀初頭のヨーロッパ社会において、その出現が顕著となり社会的弊害をもたらしていることを批判的に論じている（なお、以下では神吉訳の「大衆の反逆」(1995)から引用するが、その際、該当箇所のみ記載することとする）。

オルテガの大衆論の特徴は、大衆を数量的な概念ならびに政治的階級及び社会的階級として捉えるのではなく、精神の質である人間的階級として捉えたところにある。オルテガは、「自分に対してなんらの特別な要求を持たない(p.18) 精神的に劣った者を「大衆」、その対極にある「自らに多くを求め、進んで困難と義務を負わんとする(p.17) 精神的に優れた資質を持つ者を「貴族」と呼んだ。そして、当時のヨーロッパにおいて、「大衆」

が「貴族」に変わって「完全な社会的権力の座に登った」という事実(p.11) に対して警笛を鳴らしたのである。その事実の一つとして「大衆の政治権力化(p.20)」が挙げられており、以下のように揶揄している。

「当時の大衆は、公の問題に関しては、政治家という少数者の方が、そのありとあらゆる欠点や欠陥にもかかわらず、結局は自分たちよりもいくらかはよく知っていると考えていたのである。ところが今日では、大衆は、彼らが喫茶店での話題からえた結論を実社会に強制し、それに法の力を与える権利を持っていると信じているのである。わたしは、多数者が今日ほど直接的に支配権をふるうにいたった時代は、歴史上にかつてなかったのではないかと思う。(p.21)」

すなわち、公共問題などに関する政治的判断は、その遂行に特殊な能力が要求されるために少数者によって遂行されていたが、そうした分野においても大衆が優位を占めるようになったとオルテガは洞察したのである。さらにオルテガは、こうした大衆社会が少数者への寛容さを失い、自由主義的デモクラシー（現在の日本でいうところの議会制民主制あるいは間接民主制）を否定しかねないのではないかと疑問を投げかけている。

「敵と共存する！反対者と共に政治を行なう！かかる愛は、もはや理解されえないものになり始めるのではなからうか。今では反対派が存在している国がほとんどないという事実ほど、今日の様相を明確に示しているものはない。ほとんどすべての国において同質的大衆が社会的権力のうえにのしかかり、反対派をことごとく圧迫し、抹殺している。(p.107)」と。

確かにオルテガの大衆社会論は20世紀初頭を対象としたものであるが、現代の我が国においても前述したような社会的風潮があるとするならば、それはオルテガの論ずるところの「大衆の政治権力化(p.20)」の徴候であると考えられる。

さて、先行研究において、オルテガの「大衆の反逆」に基づいた、個人の大衆性を測定する心理尺度が作成されており、大衆性が、「傲慢性」と「自己閉塞性」の二つの因子から構成されることが示されている²⁾。ここに、「傲慢性」とは「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向」、 「自己閉塞性」とは「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表している。そして、この心理尺度を用いて、個人の大衆性がどのような社会的影響を及ぼすかについて検討が加えられている。

羽鳥ら(2008)³⁾は、大衆性の高い個人が、政府・行政に対する直接的な関与を強く要求する一方で、政府・行政の公共事業の必要性を認知せず、さらに政府・行政を信頼しない傾向にあることを示し、人々の大衆化が、あら

ゆる公共事業に対する合意形成を阻害する可能性を持つことを指摘している。そして、公共事業を巡る合意形成問題における本質的課題の一つが、個人の大衆性という心理的傾向性にある可能性を指摘している。

このように既存研究では、大衆性と、政府・行政や公共事業に対する態度・意識の関連性について分析されている一方で、人々がより直接的に政治に関わる手段である選挙との関連性は分析されていない。したがって、現代の我が国においても「大衆の政治権力化(p.20)」が進行し、人々の大衆化が社会的弊害をもたらしている可能性があるのであれば、一般民衆が政治に関与する手段としてより影響力の強い投票行動の側面から、大衆性と政治に対する態度との関連についての知見を蓄積することは極めて重要であると思われる。そこで、本研究では、アンケート調査及び分析を行い、オルテガの論ずる大衆性と投票行動の判断基準の関連性に関して探索的に把握することを目的とする。

2. 調査概要

アンケート調査は大手インターネット調査会社のリサーチモニターを対象に 2013 年 6 月下旬に大阪府堺市の住民を対象とした Web アンケート調査を実施し、500 名から回答を得た。なお、アンケート実施に当たっては、年代（20 代、30 代、40 代、50 代、60 歳以上）や性別が均等となるようにした。

本調査では、以下(1)に示すような個人の大衆性指標を測るための質問事項を設定するとともに、(2)に示すような投票判断に関する質問事項を設けた。なお、本調査では、この他にも、情報源として接触するメディアやテレビ番組の視聴頻度などを尋ねているが、誌面の都合上、それらの質問項目は割愛する。

(1) 大衆性

大衆性指標を測るための質問項目として、先行研究で提案された大衆性尺度を用いて、表-1 に示すような 2 因子（傲慢性、自己閉塞性）19 項目の質問を設定し、各項目について「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の 7 件法で回答を要請した。ここで、傲慢性は、自分自身や社会等の種々の対象に対する自らの制御能力に関する過大な評価に関わる質問項目から構成される。一方、自己閉塞性は、外部世界に対する関心および外部世界との紐帯やその中で の責務に関わる質問項目から構成される。そして、「傲慢性」尺度については対応する 12 項目の加算平均から、「自己閉塞性」尺度については対応する 7 項目のそれぞれを反転した上で求められる加算平均から、それぞれの尺度を構成した。なお、各尺

表-1 大衆性尺度の質問項目

質問項目
<p>「傲慢性」尺度 ($\alpha=838$)</p> <p>自分を拘束するのは自分だけだと思う 自分の意見が誤っている事などない、と思う 私は、どんな時でも勝ち続けるのではない、と何となく思う 自分個人の「好み」が社会に反映されるべきだと思う どんなときも自分を信じて、他人の言葉などに耳を貸すべきではない、と思う 「ものの道理」には、あまり興味がない 物事の背景にあることには、あまり興味がない 日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う* 世の中の問題は、技術ですべて解決できると思う 人は人、自分は自分、だと思ふ 自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されぬことだと思ふ 道徳や倫理などというものから自由に生きていたいと思ふ</p> <p>「自己閉塞性」尺度 ($\alpha=821$)</p> <p>伝統的な事柄に対して敬意・配慮をもっている* 日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている* 世の中は驚きに満ちていると感じる* 我々には、伝統を受け継ぎ、改良を加え、伝承していく義務があると思ふ* 自分自身への要求が多い方だ* もしも奉仕すべき対象がなくなれば、生きている意味がなくなるのではないかと思ふ* 自分お進んで義務や困難を負う方だ*</p>
<p>α: クロンバックの信頼性係数 *は逆転項目</p>

度の信頼性分析の結果、 α 係数は「傲慢性」については.838、「自己閉塞性」については.821となり、一定程度の信頼性が認められた。また、両者は有意に負の相関(-.274)を持つことが示された。

(2) 投票判断

投票判断の指標を測定するため、「いろいろな選挙(国政、府知事選、市長選など)で誰に投票するかという判断には、以下のそれぞれはどれくらい関係していますか」という質問を設定し、以下の a), b), c), d)で説明する項目に対して、「とても関係している」から「全く関係していない」の7件法で回答を要請した。

a) 「知名度」「周りの人の意見」「メディア」

オルテガによれば、大衆とは「一つの意見をしっかりと造り上げる努力をせずに、この問題に関する意見をもつ権利を有していると信じ込む(p.96)」者のことであり、また、「自分自身に特殊な価値を認めようとはせず、自分は“すべての人”と同じであると感じ、そのことに苦痛を覚えるどころか、他の人々と同一であると感じることに喜びを見出しているすべての人(p.17)」のことである。つまり、大衆には、自分自身で物事を考え判断することを避け、周りの人の意見に同調するという性質があると解釈できる。そこで、投票判断の基準として「候補者の「知名度」はどうか?」「自分の周りの人」の意

見はどうか?」「候補者に対する新聞、テレビなどのマスメディアの「評価」はどうか?」の3項目を設けた。

b) 「古い政治からの脱却」「改革」

大衆は「自分が過去のどの生よりもいっそう生であると感じるあまり、過去に対するいっさいの敬意と配慮を失ってしまった(p.47)」のであり、当時のヨーロッパ文明が「過去のいかなるものにも、規範や模範たりうる可能性を認めない時代(p.48)」へと陥落しつつあるとオルテガは洞察した。このことから、大衆の性質に、過去のものへの忘恩や改革志向が内在していると考えられる。そこで、投票判断の基準として「「古い政治から脱却できる」かどうか?」「「改革」できるかどうか?」の2項目を設けた。

c) 「おもしろさ」

大衆は「国家という組織が不安定なものであるということに気づかないし、自己のうちに責任を感じるということがほとんどない(p.143)」者のことである。オルテガはこうした大衆の心理状態を「甘やかされた子供」「慢心しきったお坊ちゃん」「良家の御曹司」のものと同様であると批判し、以下のように論じた。

「不まじめと「冗談」、これが大衆人の生の主調音なのである。彼らが何かをやる場合は、「良家の御曹司」がいたずらをするのと同じように、自分の行為は取り消すことができないのだという真剣さに欠けている(p.147)」そこで、こうした大衆の「不まじめと「冗談」」を表す投票判断基準として、「「おもしろい」候補者かどうか?」という項目を設けた。

d) 「所属政党」「政策」「人柄」

善教ら(2012)⁴⁾は、2011年に行われた大阪市長・府知事同日選挙を対象に、有権者の政治意識及び政治行動の実態をアンケート調査によって分析している。そこでは、有権者がそれぞれの候補者に投票する際に、「候補者の政策」「候補者の人柄」「候補者の所属政党」などの中で何を最も考慮したのかを調査している。その結果から、多数派は候補者の政策や所属政党を、少数派は候補者の人柄を、投票先決定時の判断基準にしていることが見て取れる。前述したような「大衆の政治権力化(p.20)」の徴候が現代にも表れていることを踏まえるならば、ここでの多数派を大衆と捉えることは可能であると考えられる。そこで、本研究では、投票判断基準として、「候補者の「所属政党」はどこか?」「候補者の「政策」がどのようなものか?」「候補者の「人柄」はどうか?」の3項目を設けた。

表-2 大衆性と投票判断基準の相関分析結果

	平均	標準 偏差	傲慢性		自己閉塞性	
			r	p	r	p
候補者の「知名度」はどうか？	3.476	1.600	.247 ***	<.001	-.286 ***	<.001
「自分の周りの人」の意見はどうか？	3.426	1.611	.179 ***	<.001	-.259 ***	<.001
候補者に対する新聞、テレビ等のマスメディアの「評価」はどうか？	3.796	1.623	.145 **	.001	-.296 ***	<.001
「改革」できるかどうか？	4.764	1.622	-.046	.302	-.361 ***	<.001
「古い政治から脱却できる」かどうか？	4.788	1.731	-.072	.108	-.324 ***	<.001
「おもしろい」候補者かどうか？	2.850	1.532	.305 ***	<.001	-.276 ***	<.001
候補者の「所属政党」がどこか？	4.966	1.775	-.090 *	.045	-.302 ***	<.001
候補者の「政策」がどのようなものか？	4.948	1.732	-.074	.100	-.356 ***	<.001
候補者の「人柄」はどうか？	4.628	1.673	.029	.511	-.426 ***	<.001

r:相関係数, p:有意確率, *5%有意, **1%有意, ***0.1%有意(両側),

3. 結果と考察

大衆性を構成する2尺度と投票判断に関する質問項目間の相関分析を行った。その結果を表-2に示す。

まず、自己閉塞性尺度に着目すると、全ての質問項目において0.1%水準で統計的に有意に負の相関を示した。その理由として、自己閉塞性は「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表したものであることから、自己閉塞性の高い個人は外部への配慮を欠いており、選挙そのものにも無関心であり、したがって、選挙判断の前提となる各種の要因について配慮する傾向そのものが低い、という傾向が存在するものと考えられる。なお、その中でも相関係数の絶対値が最も高い値を示した項目が「候補者の「人柄」はどうか？」であったことから、自己閉塞性の高い個人は、投票判断の基準として候補者の人格をより大きく軽視している、という傾向が示唆された。

議会制民主制では、選挙民たる一般民衆は、平均において、政策について議論（予測と判断）する能力はないが、政策について議論できる代表者をその「人格」から判断し選出する能力を有しているという前提に基づいているという指摘(西部, 2004)⁹⁾を踏まえると、議会制民主制をとる我が国において、投票の判断基準として候補者の人格は重視されてしかるべきものである。しかし、自己閉塞性の高い個人は選挙に対して無関心であり候補者の人格を軽視する傾向が強いという本研究のデータは、閉塞性の高い大衆人には、議会制民主制において求められる資質が十分に備わっていないという可能性を暗示しているものと解釈できる。

次に、傲慢性尺度に着目すると、「候補者の「知名度」はどうか？」、「自分の周りの人」の意見はどうか？」、「「おもしろい」候補者かどうか？」の3項目において0.1%水準で統計的に有意に正の相関、「候補者に対する新聞、テレビなどのマスメディアの「評価」はどうか？」において1%水準で統計的に有意に正の相関、「候補者の「所属政党」がどこか？」において5%水準

で統計的に有意に負の相関が確認された。この結果は、傲慢性の高い個人は、投票判断の基準として、所属政党を軽視する傾向にある一方で、候補者の知名度や、周りの人の意見、メディアでの評価、候補者の面白さを重視する傾向があることを示唆している。つまり、傲慢性の高い大衆人は、自分自身で物事を深く考えず、候補者の知名度や、周りの人の意見、メディアでの評価、候補者の面白さといった、表面的な情報を判断基準に投票先を短絡的に決定しているものと解釈できる。

また、その中でも相関係数の絶対値が最も高い値を示した項目が「おもしろい候補者かどうか？」であった。そもそも傲慢性とは、とりたてて根拠が無いにも関わらず、とにかく自分自身には様々な能力が携わっていると過信し、とにかく自分の望み通りに物事が進むであろうと楽観している程度を意味するものであった。それ故、彼らは、傲慢にも自分の好み通りに政治が進むであろうと楽観し、「候補者のおもしろさ」という不真面目な基準でもって、投票を行っている傾向にあることが、本研究の分析結果により示唆されるところである。

4. まとめ

本研究では、オルテガの論ずる「大衆の政治権力化(p.20)」が、現代の我が国においても進行しつつあるのではないかという問題意識のもと、大衆性と投票行動の関連性を探索的に把握することを目的として、大衆性と投票判断基準に関する相関分析を行った。その結果、自己閉塞性の高い個人は、選挙そのものに無関心であり、かつ候補者の人格をより大きく軽視する傾向が示唆された一方で、傲慢性の高い個人は、自分自身で物事を深く考えず、候補者の知名度や、周りの人の意見、メディアでの評価、候補者の面白さといった周辺情報で投票先を短絡的に決定し、特に候補者の「おもしろさ」といった不真面目な基準をより大きく重視する傾向が示唆された。

これらの結果について改めて留意すべき点は、本研究で対象とした「大衆」とは、特定の間人や集団のことでなく、万人が多かれ少なかれ持ち得る心理的側面であるという点である。すなわち、国民各々が、程度の差こそあれ、大衆性という心理的傾向性を持っているということである。そして、選挙では年齢的制約などがあるものの、ほぼ全ての国民に投票資格が与えられていること、また、選挙は国民が政治に関与する手段としてより影響力の強いものであることを考慮すると、本研究で示唆された大衆の投票判断の傾向は、我が国の政治に多大な影響を与えている、もしくは与えうる可能性があるものと考えられる。

ただし、本研究で用いているデータは堺市民のみを対象として得られたものであり、今後はより広範なデータを収集した上で、より包括的な分析を行っていくことが必要である。

参考文献

- 1) オルテガ・イ・ガセット：大衆の反逆(1930年刊)、(神吉敬三訳)、ちくま学芸文庫、1995。
- 2) 羽鳥剛史、小松佳弘、藤井聡：大衆性尺度の構成—“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析—、心理学研究, Vol.79, No.5, pp.423-431, 2008。
- 3) 羽鳥剛史、小松佳弘、藤井聡：政府に対する大衆の反逆：公共事業合意形成に及ぼす大衆性の否定的影響についての実証的研究、土木計画学研究, 25(1), pp.37-48, 2008。
- 4) 善教将大、石橋章市朗、坂本治也：大阪ダブル選挙の分析—有権者の選択と大阪維新の会の支持基盤の積明—、関西大学法学論, 2012
- 5) 西部邁：学問、講談社, 2004。

A STUDY ON THE VULGARITY OF THE MASSES AND VOTING BEHAVIOR

Satoshi NAKAO, Ryoshun NUMAJIRI, Ayu MIYAKAWA and Satoshi FUJII

Philosopher Ortega of Spain called the persons who regard himself as others without feeling ashamed and feel pleased at being the same as others the vulgarity of the mass, and stated critically that the remarkable appearance of them in modern society caused social problems. It is often pointed out that the popular politics by the vulgarity of the mass who tend to be passed by the popularity of public opinion without self-reliance also in Japan actually poses a various problem. So, in this study, paying attention to the vulgarity of the mass that Ortega discusses, I test the relevance of the vulgarity of the mass and voting behavior by a Web questionnaire.